

# 財団創設30周年に当たって

江橋 節郎

我が国の科学振興に多大の貢献をされてこられた三菱財団がここに創設30周年を迎えられることに祝意を表するとともに、その恩恵にあずかった者の一人として心から御礼申し上げます。その発足の年、1969年は、大学という特殊社会にとっては正に転回点でした。国を挙げての動乱一步手前の様相を呈した安保騒動の後、池田内閣のとった融和政策がある程度功を奏し、国内は平静を保つとともに、後年の経済繁栄に向けての上昇機運の徴が各所に見られるようになっていました。しかし安保で高まった大学生のエネルギーは、この平和志向の社会の中で捌け口を失い、キャンパス内で大学当局に鋒先を向けることとなり、1968年後半には世界的な学園紛争に拡大したのであります。

戦後の我が国大学の研究体制は、産業との連携を拒否する大学の体質と、産業優先の政府の方針の狭間で、西欧諸国からは想像のつかない貧困の中に打ち棄てられてきました。その様な状況下に起こった大学紛争に対して、政府がどの様に対処するかは我が国學術の将来を卜するものでした。従来慣行からいえば、この様な事態に対しては懲罰的な予算削減乃至は停止となるのが普通であり、一部にはそういう動きも見られましたが、他方では紛争は大学の貧困が一つの原因であり、これになんらかの対策を講ずるべきだという意見も併存しました。後者のような前向きの見解を支えた一つの要因に、私は三菱財団の設立があったと考えています。我が国経済の基幹である三菱グループが、敢然として基礎的科学の振興を誦い、これに巨費を投ずることとなったのは極めて象徴的でした。

約14件、計約1億円という発足時の援助(自然科学部門)は、当時の物価が現在の3分の1である事を考えると、現在と略同額ということになります。しかし、戦後の窮乏時の心理から脱する事ができず、研究助成ということ自体が社会常識になかった時代におけるこの快挙は、紛争の後遺症に悩む大学にとっては、精神的にも実質的にも正に干天の慈雨でした。この事はある意味で三菱財団助成金の性格を決定づけたと思われまます。即ちこの助成金受領者は代表選手と見なされました。現在でもこの助成金を「賞」扱いする風潮が根強く存在しますが、それは、以上の様な発足の際の社会情勢が大きく関係していると思われまます。

三菱財団の自然科学助成金の最大の特徴は、完全公募という募集方式、つまり研究者は、その所属地位学歴に拘わらずすべて同等の資格を有するとの大前提に立ったことであります。この世界にも稀な解放路線は、三菱グループの社会的権威と見事な対比を示し、その声価を一層高めることとなりました。その結果、自然科学部門における毎年の応募は最近では約800件に達し、その選考には、選考委

員ばかりでなく、これを支える財団職員にも筆舌に尽くせぬ負担がかかります。本財団の比類ない評価は、この様な努力に支えられた30年の歴史に負うものと考えられます。

以上の点は、多くの方のご意見に共通のものであり、私自身も折りに触れて同様の趣旨を述べて来ました。最近三菱グループがその意図をさらに発展させ、基本金の倍増を果たされる決定をされたことは、研究者の一人として心から感謝し、また敬意を表するところであります。

さてこの拙文を終わるに当たり、どうしても触れねばならない問題があります。それは科学技術基本法成立に伴う大型研究費設定の事です。今や一部の研究者には、我々貧乏研究者の若い時代には夢にも考えられなかった巨額の研究費が支出されるようになりました。横並び思想の強い我が国では、これが研究者間にある種の風波を巻き起こしていることは事実ですが、しかしそれは飽くまで一時的な問題であり、この財政的措置が、我が国の科学技術の将来に極めて重要な布石となることは疑いを入れません。そこで問題となるのは、三菱財団を始めとする民間財団の位置付けであります。現に審査に携わっている者の実感から申しますと、実力があらずらその様な大型ファンドに与り得なかつた研究者にとって、本財団は正に命綱であり、それに対する熱意がいやが上にも高まってくるのは当然です。それは結局学問に対する真剣さの表れに他なりません。

研究の独創性という立場から最も大切なことは、初期の手探りの段階において、発想と用途の自由を保障する適切な額の研究費の存在であり、必ずしも膨大な研究費を必要としません。この点で、完成途上にあり、必然的に研究対象が制約されるサブジェクト研究に必要な大型ファンドとは、いわば相補的な関係にあるといえましょう。我が国の研究支援体制もここに漸く整備されて来ました。これが経済不況の下で成し遂げられつつあることの意義は重大です。今や研究者は、その不成績に対し、弁解の余地がなくなって来たことを、研究者の一人として痛感する次第です。

当財団理事  
前自然科学委員長